

第8回 厨川白村のワイルド紹介

(1) 厨川白村

厨川白村(1880 -1923)は京都生まれの英文学者、評論家である。本名は辰夫。東京帝国大学英文科では小泉八雲(Lafcadio Hearn, 1850 -1904)、夏目漱石(186 -1916)、上田敏(1874 -1916)に学び、明治37年(1904)に卒業。大正5年(1916)にアメリカ留学中に京都大学助教授となり、帰国後、文学博士となる。明治45年(1912)の『近代文学十講』(大日本図書)、大正9年(1920)の『象牙の塔を出て』(東京朝日新聞社)、大正10年(1921)の『近代の恋愛観』(改造社)などの著作がある。

(2) 「近英詩人の時勢に対する関係を論ず」

明治40年(1907)10月～12月の『帝国文学』(第13巻 第10号～第12号)で「近英詩人の時勢に対する関係を論ず」で当時のイギリス詩壇の傾向を取り上げた。副題として「特に超然高踏の詩人に就て」とあり、「(一)時勢、(二)時勢の指導者、(三)懐疑厭世の風潮、(四)超然高踏の詩人」の項目に分かれている。白村はイギリスの時勢の風潮として「此科学万能の時勢、物質主義の俗悪な時勢」⁽¹⁾を取り上げ、この時勢に反抗するものとして、テニソン、ブラウニング、ラスキン、ロセッティ等を取り上げている。ワイルドについては、ラファエル前派に萌芽を發したデカダン文学として紹介している。

何もデカダン文学は大陸に限らぬ、英国のオスカア・ワイルドや、現存のイツだのアアサア・シモンズなどが文界の大勢力となって…⁽²⁾

(3) 『近代文学十講』

白村の主張は明治45年(1912)の『近代文学十講』(大日本図書)でより鮮明となる。「第四講 近代の思潮(其二)」の「近代の悲哀」の中では、

即ち生まれつき詩的精神 l'ame poétique の豊かな人は近代の物質文明が作り出したこの索漠たる感想無味の功利的生活に堪へられない、これに対し断えず不満である。そこでおのづから現代生活を厭離し逃避するやうになり、世のなかはどうでもよい、自分一個だけは別天地に独り寂しい詩美の郷 - - 所謂『象牙の塔』のなかに隠れて現代生活を忘れようとする。ペンキ塗の家や煤煙に汚れた工場から面をそむけようとはするが、ことさら見まいとすれば、なほのことその醜悪なのが目に附いて苦痛は一層甚だ

しい。詩人 Swinburne や Leconte de Lisle のやうに古代希臘の美しい昔を慕ふ人もある。後段に説くところの耽美派 Aestheten のやうに、醜汚な物質生活に反抗して、無理にでも人工的に、美の刺激の甘き歡樂を食らうと焦り、自分の鋭い感受性を通して別に美の世界を創建しようといふ一派もある。(3)

と述べている。さらに「第五講 自然主義(其一)」の「浪漫主義より自然主義へ」の中で、芸術至上主義にふれ、

醜穢悲惨な此浮世をよそにして、別に清く高くまた楽しき『芸術の宮』
- - 詩人テニソンの歌ったやうな the Palace of Art 或は Sainte-Beuve が
ニイを評した時に言つた『象牙の塔』 tour d'ivoire (この句は舊訳
『雅歌』第七章四節にも見える)のなかに、独り立籠らうとふ所謂『芸術
の為の芸術』 art for art's sake がその主張の一面であつた。(4)

と、述べている。時代は「芸術のための芸術」から「人生のための芸術」へと流れる中での厨川の主張である。また、後年の『象牙の塔を出て』の内容の前身としても注目してよいだろう。「第十講 非物質主義の文芸 (其二)」の中で「耽美派と近代詩人」を設け、ワイルドについても論じている。白村はノルダウの *Entartung* を参考にしながら、ダヌンチオ、メーテルリンクとワイルドを同じ系統として受けとめている。

(4) 「オスカア・ワイルドの警句」

白村のワイルド紹介で最も注目しておきたいのが、明治42年(1909)5月の『帝国文学』(第15巻第5号)で「オスカア・ワイルドの警句」を掲載し、ワイルドの警句を本格的に紹介したことである。これは *Sebastian Melmoth* (1904)を抄訳したもので、警句集は小説・戯曲・批評などから抜粋されたもので、「人生が芸術を模するのは、芸術が人生を模するも更に大なり」なども紹介されている。

参考資料

厨川白村 『厨川白村全集』(全6巻、改造社、1929年2月~8月)

注

- (1) 厨川白村「近英詩人の時勢に対する関係を論ず」(『帝国文学』第 13 卷第 10 号、1907 年 10 月), p.1344.
- (2) 厨川白村「近英詩人の時勢に対する関係を論ず」(『帝国文学』第 13 卷第 12 号、1907 年 12 月), p.1683.
- (3) 厨川辰夫『近代文学十講』(大日本図書、1921 年 4 月), pp.168-169.
初出は 1912 年 3 月(大日本図書)。
- (4) Ibid., p.260..